

## 書評『リアル世界をあきらめない

### ——この社会は変わらないと思っているあなたに』

(時代をつくる文化ラボ編、はるか書房、2016)

今井 聖 (立教大学文学研究科教育学専攻博士後期課程)

多領域の研究者たちによって書かれてはいるが、単なる学術書とも言いがたい本書は、一体誰に向けて、どのようなねらいで書かれたものだろうか。ここで改めて考えてみたい。

本書において、内容以前にまず特徴的なのは、その語り口である。ときに「学生思い」の大学教員が個別の学生に対して丁寧に話すような口調で、本書は読者に語りかける。それらはすべて、現代の日本社会について具体的に考えるうえで重要なテーマや問いに関する言葉だ。そして、それらは読み手にとって「きみはどう考え、どう生きるのか」を問いかけるものでもある。

どの章においても、筆者たちの言葉は切実である。なぜ、そのように読む事ができるかといえば、それは「社会」を語ると同時に、濃密でリアルな「自分語り」がなされているが故なのではないだろうか。人びとが惹き付けられるのはいつも、確固たる「自分」をもつ人であり、そうした「自分」をもつ人の語る言葉はリアルに聞こえる。本書はそのような魅力をもっているのだ。

本書は4つの章で構成されている。

第1章で小谷英夫は、「行き過ぎた自由」が悪者視される現代の社会の有り様を指摘することから、「自由ってそもそも何だ」、「きみはそもそも自由だろうか」と問いを投げかける。続けて小谷は、自由について考えるための「自分語り」をはじめ。この「自分語り」が相当に面白い。小谷の大学受験時代、大学時代の経験、さらには友人の「職業人」的語りとの邂逅などを通して描かれるのは、小谷なりの、自由を手にしていくための格闘と、我々の生を息苦しくさせている「不自由」についての気付きの経験である。ここで後者、すなわち我々に着せられている「不自由」と「社会」が関係しているという指摘に留まらず、自由も社会と不可分のものであることを、小谷は強調する。「ぼくらは生まれながらにして自由な存在である。ところが、生まれながらに『自由を行使できる自立した個人』として存在しているわけではない。ぼくらは教育を受け、さまざまな人に会い、さまざまなことを経験し、学びながら成長し、ようやく自立した個人になる」(p. 23)。

続けて小谷が論じるのは、土台の上に二階建ての建物が建つ、三層構造をモデルとする、自由のあり方についてである。そのような自由こそ、我々が目指すべき自由であると小谷は主張するのだ。「土台」の上に建つ、二階建ての建物。その「一階部分には、あれやこれやの具体的な事柄を選択・決定する自由があり、二階部分には、ぼくらの生き方や幸福、価値観、アイデンティティといったより抽象的でより大切な事柄を選択・決定する自由が

ある」(p. 25)。この階層的な区分の妥当性を問うような議論もあり得るだろう。しかし評者は、ここで小谷が正しく指摘する「土台」に着目したい。すなわち、仮に我々の自由をそのように層的なものとしてとらえようとするのであれば、重要なのは、「ぼくらが自由な個人になり、自由な個人であり続けることをサポートするような人間関係・社会関係・社会制度が土台であり、その上に二階建ての建物がある」(p. 25) ことを認識し、その「社会的なもの」のあり方を問い続けていくことである。このような視点は本書全体で共有されたものであり、『リアル世界をあきらめない』という力強いスローガンの真意は、自由に生きるための土台としての社会の、より良きあり方(オルタナティブ)を構想する営為をやめないという決意表明であり、同時に読者への呼びかけなのではないだろうか。本書第1章では続けて、貧困、少子化問題、「自己責任」論、コンビニ社会といったテーマが論じられるが、これらはすべて、我々が「自由」をいかなるものとして捉えるのか、という論点と深く結びついている。

第2章で小山花子によって論じられる民主主義というテーマも強大だが、「民主主義のエイジング」というメタファーのもとで、様々な局面における現代的な問題が指摘される。小山は、アメリカ社会の現況にも目配せしつつ、人びとの「無関心」や「不感症」的な有り様を指摘し、いかにそれらと闘っていくかを考える。したがってここで、「民主主義のエイジング」は、人びとの「無関心」というあり方に顕在化したものとして捉えられるのだ。

「アンチエイジングへの道」を構想する小山の議論は刺激的だ。小山は無関心を論じる次のような定説を再考した上で、その先への行き方を探る。すなわち「いまが豊かなので、欠如の認識が困難なのだ。……僕らは、もはや何か欠けているという認識を抱くことがなくなった」(p. 57) という説である。小山はこのよく耳にする説に対して再考を促す議論のなかで、「豊かな社会であるとはいうものの、欠如の感覚はむしろ溢れている」(p. 58) と指摘する。問題なのは、欠如を法則的に埋められるものとして捉え、それをインスタントに埋めようとする人びとの有り様であるという。そこで無視されるのは、「民主主義の欠如」のような、深刻で、簡単には埋めがたい欠如なのだ。次に小山が述べるのは、「僕らが自動的に訪れるものではなく、自動的に訪れないものの訪れに惚れ込むことができるようになったとき、民主主義のアンチエイジングへの道が拓けてくるのではないか」(p. 59) ということだ。だが、そうした簡単でないものに惚れ込む前提として、人びとはその価値に自覚的であらなければならない。本章の議論が、民主主義をめぐる100年前の歴史からはじめられていることのうちにも、そうした価値に気付くための歴史的な学びの重要性が物語られているのではないだろうか。

本章の最後で小山は、現状について「そこまで悲観していない」と語る。そこで語られるのは、大学の講義において、女性専用車両の是非について盛り上がり議論する学生たちの姿についてである。女性専用車両に限らず、ある存在について是非を論じようとするれば、なぜそのものが存在するのか、誰によって必要とされ、社会はどのように変化したのか等、歴史的な考察が不可欠になるだろう。本章において、小山が「無関心」との闘いの

中で示唆するのは、そうした知の必要性なのではないか。

第3章では、「生活世界のアクチュアリティ」という章題が物語るように、極めてリアルに「身近な問題」が語られる。筆者である和田悠は、主として、育児をする父親という視点から、生活や家族に関わる問題を論じる。「いまもその旅の途中」という和田の言葉は、一段とリアルで切実で、強い説得力をもっている。

和田は自らの子育て経験から、「乳児からの子育て」が有する、「男」にとっての効能を論じる。乳児の子育ての場では、育児者は、「決定的に『受け身』であることを強いられる」のであり、そこで和田は「これまでにない異質な経験」をしたと述べる (p. 84)。和田は、自らのこの経験を、男性優位社会を生きる男性にとって、乳児からの育児参加という「受け身」経験が与える効能として敷衍する。すなわち、こうした経験は「男性が内面化している支配的・攻撃的な身振りを問い直す」(p. 87) 契機になりうるのだと。

和田の議論はさらに、「社会」と接続していくが、ここで意識されるのは、国や政治の存在である。まず、国が主導する「男性の育児参加」が、女性を働かせるための少子化対策の一環として打ち出されたものであり、貧困や雇用の問題を度外視した不十分なものであることが指摘される。また、和田にとって、居住地域の保育園の保護者会運動への参加は、「はじめて自らが担った社会運動」(p. 91) だったという。その後のエピソードを読めばわかるように、和田は子育ての当事者となったことで、保護者会運動や地域の取り組みにコミットしていく一方で、「政治の貧困、行政の怠慢」(p. 124) への自身の鋭敏な問題意識を練り上げていくことになるのである。

リアルを語ろうとするならば、理想や成功談ばかりを語ってははいられない。第3章の終わりに付された「Dialogue ママ友世界のリアル」では、和田の「経験にもとづくフィクション」が鼎談形式で伝えられるが、そこでは男性として保育の場に参加することにもなう困難をも、知ることができる。

第4章で澤佳成が語るのは、我々が生きていく環境を守るために何ができるのかについてである。前半部では、道路計画に反対する住民たちの具体的な取り組みから、地域に根ざした民主主義による社会づくりの可能性が述べられる。「若葉の森」を守る住人運動の成功の秘訣として6点が論じられているが、ここで述べられるのは、特効薬的な「秘訣」というよりはむしろ、根強く、継続的な議論と連帯が図られたことである。澤が自らの災害ボランティア経験を回顧しながら語る後半部からもわかるように、我々にできるのは、他者との関係や連帯に支えられ、ときに葛藤や困難に満ちた、それでも前向きさを失わない小さな行動を、自分なりに積み重ねていくことでしかないのだろう。

突飛なようだが、ある人工知能について述べよう。米 IBM 社が開発した人工知能 Watson は、自然言語を理解・学習し、大量のデータから適切な回答を選択することができるという。Watson は、IBM が制作したテレビ CM の中で、Bob Dylan を前にして、彼のすべての曲の歌詞を読み込み解析してみせ、「あなたのテーマは、時の流れと移ろう愛ですね？」と問いかける。それに対して Bob Dylan は、「そうかもね」と答える。

『リアル世界をあきらめない』ために我々ができること。それは、過去の歴史に学び、未来のオルタナティブな社会を見据えながら、今自らが生きている「世界」と自らの言葉と行動について、反省的に捉え直していくことでしかない。たとえその意味を問われても「そうかもね」と答えながら、ひたすらに、直向きに取り組むしかないのだ。本書の筆者たちの一人称の語りは、読者に、自らの「リアル世界」のために何ができるのかを問いかけるのだ。